§3-3.

実験Ｃ　全体考察

1.　顔の女性度評定における肌色の作用

本実験の第一の目的は、肌色が持つ作用を女性度という面から探ることであった。結果はその作用の大きさを示すものであり、顔の女性度の判断に対し肌色は少なからず影響を及ぼすことが把握された。ここで求められた作用の方向性も従来のジェンダーステレオタイプに違うものではなく、概して色黒肌であれば女性度が弱まり、逆に色白肌であれば女性度が高まるという結果であったといえる。

ここでは、まず本章の両実験で用いた 50%パタンに着目したい。白黒画像の実験 C-1 では極めて中庸な印象が受け取られていたといえるが、カラー画像の実験 C-2 では肌色の作用が明確に現れていることが指摘できる（Figure 3-2-2 参照）。同じ 50%パタンという形態であっても、色白肌の場合は女性としての評価を受け、色黒肌の場合にはより女性度が低いという評価となっている。すなわち、方向性が全く反対となったといえる。この結果から判断すれば、形態的に中庸であっても、肌色によってその性別は明確に方向付けられるということが考えられる。

2.　形態と女性度評定

形態要因について確認すべきことは、物理的に規定される刺激間隔が等しくとも、女性度という心理尺度上ではその等間隔性を維持しないということである。つまり、女性度という心理的尺度は物理的刺激によって単純に規定されるものではないといえる。その刺激が持つ女性度の強さは物理的刺激に何らかの変換が加えられた上で処理されていることが考えられる。

白黒画像を用いた実験 C-1 では、50%パタンだけが独立してほぼ中立的な評価を受け、他のパタンは合成率において隣り合う刺激同士が非常に近接した評価を得た。例えば、女性パタン合成率の高い 75%パタンと 100%パタンは両者とも女性度を高く評価され、逆に女性パタン合成率の低い 25%パタンと 0%パタンにおいてもまた女性度は近似したものとなり、何れも低い値に留まった（Figure 3-1-4 参照）。信頼区間を検討した結果からは、近接して見えるこれらの刺激の間にも有意な差異

があったといえるが、女性度の変化率は明らかに不均等である。女性パタンの合成率から単純な比例関係によってその女性性が定義されるのではないことがここから捉えられる。

これらの傾向から推測されることは、女性度においても「飽和点」が存在する可能性である。実験 B-1 の結果より、25％パタン、75％パタンは既に安定した性別判断を得るに足る形態情報を備えているということが指摘できるが、ここで新たに考えられることは、女性度という印象が頭打ちになるポイントとしても当該の「飽和点」と捉えることができるということである。これ以上に男性化、女性化が行なわれても印象の変化として捉えられない、或いはその変化が極めて過小に評価されるという可能性を考えることもできる。

このように本結果を捉えた場合、性別の印象には一定のレンジがあり、無限の広がりを持つものではないということが想像される。また、先に示した「飽和点」は各性別の典型パタンとしても捉えることができると思われるが、典型として表象される像は蓄積された視覚情報によって構成されていると推測される。判断が安定するポイント、女性度が頭打ちになるポイントがほぼ一致していることを踏まえ、内的に保存されている男女のプロトタイプを探ることも有用となってくるであろう。

また、各印象について一定の心理量が与えられるとそれ以上の細かな処理が抑制される可能性についても考えてみなくてはならない。顔に対峙する場面においては、性別というラベルから情報を補い、コミュニケーションを円滑に進めていける場合も多々ある。このように考えた場合、相手が男性なのか、女性なのかということこそ重要であり、極めて男性的、やや女性的といった印象の細かな違いは問題とならないということができる。つまり、相手の性別が安定すれば第一に抽出されるべき情報は得られたということになるであろう。各性別の印象が飽和する点、印象の変化が鈍る点が存在するのは、必要な情報を効率的に取り出すための方略であるとも考えられる。

3.　肌色別にみた顔形態の作用／顔形態別にみた肌色の作用

次に、形態パタンの影響を肌色別にとり出してみたい。Figure 3-2-2 において各刺激の布置が確認できるが、まず色黒肌刺激に着目してみる。完全ではないが、隣

り合う刺激同士はほぼ等間隔であるといえるであろう。しかし、他方の色白肌は異なる。その特徴は 50%パタンと 60%パタンの近接であるといえるが、これらの結果は付帯する肌色によって形態の影響の大きさが異なることを示唆するものである。つまり、色黒肌の場合には形態情報における物理的間隔がほぼそのまま性別の印象に反映され、その等間隔性が保たれる。一方、色白肌の場合には 50%と 60%パタンの間に存在する形態的な差異が過小に評価され、印象の差異が捉えられにくくなるといえる。

では、逆に形態パタン毎に肌色の作用を取り出した場合はどうであろうか。再度 Figure 3-2-2 に目を向けると、40%パタン及び 50%パタンにおいて色白-色黒間の間隔が広く、60%パタンでは極度に狭くなっていることが分かる。また、40%と 50%パタンにおいては、両パタンの色黒肌に対する評定同士の間隔をそのまま保って女性評定側に移動させたものが色白肌に対する評定となっている。性別判断を扱った実験 B-1 の結果に照らした場合、40%、50%のパタンは比較的判断が安定しない形態であると言えるが（第 2 章　Figure 2-1-2 参照)、このような形態が伴う場合には肌色による印象の違いがより明確になり、肌色が加算的に作用するということが考えられる。より具体的には、色白肌は女性度を高め、色黒肌は女性度を低めるということになる。またここで確認すべきは、これらの形態条件において肌色は形態が持つ情報を阻害せず、全く加算的に働いているということである。

しかし、60%パタンについては色白-色黒間の差が極めて小さく、このような考察が成り立たない。実験 B-1 では全体の 9 割が 60%パタンを女性として判断したことになるが、これを踏まえた場合、前項で示したように女性度の判断においても「飽和点」が存在することが考えられる。顔の性別認知場面においては、その顔が男性のものか女性のものかということが第一の問題であり、判断が安定している場合はより詳細な印象分析へと移行していく可能性も考えられる。つまり、判断に至る経路が異なる可能性についても考えてみるべきではないかと思われる。

4.　60%パタンの色白-色黒の近接

ここで更に、60%パタンにおいて肌色間の差異が不明確となった結果に対して分析を進める。

Scheffe の一対比較法において導かれる「差がない」という結果に対しては、2 通りの解釈が可能である。「どちらも同じ」という段階が極めて高い頻度で選択されたとするのが第一の解釈であり、評定が分かれた結果として値が相殺され、方向性を失ったとするのが第二の解釈である。60％パタンにおいて評定のばらつきが大きいとすれば、意見が分かれ易い、評定が安定しないという解釈が妥当となる。Table 3-3-1 はパタン毎に色白肌と色黒肌の比較試行の結果のみを取り出した表であるが、60％パタンに対してはまさにこのような解釈を適用すべきであることが読み取れる。尚、実験 C-2 における回答は、左側に色白肌刺激、右側に色黒肌刺激が提示された場合の回答となるよう調整されている。よって、例えば表中の「-2」の欄は色白肌の方がかなり女性に見えた場合を示す。

Table 3-3-1　各顔パタンにおける評定の内訳

		色白の方が色黒より非常に	色白の方が色黒よりかなり	色白の方が色黒よりやや	どちらも同じ	色黒の方が色白よりやや	色黒の方が色白よりかなり	色黒の方が色白より非常に	
		-3	-2	-1	0	1	2	3	合計
40％パタン	男性評定者	1	6	22	9	9	2	0	49
	女性評定者	0	6	20	11	5	1	0	43
50％パタン	男性評定者	2	12	23	7	5	0	0	49
	女性評定者	0	3	21	6	9	3	1	43
60％パタン	男性評定者	0	2	15	8	17	7	0	49
	女性評定者	0	4	10	5	20	3	1	43
40％パタン	合計	1	12	42	20	14	3	0	92
50％パタン	合計	2	15	44	13	14	3	1	92
60％パタン	合計	0	6	25	13	37	10	1	92

男女で若干の差はあるが、60％パタンの特殊性はこの表から十分に読み取れる。40％及び 50％パタンにおいては明らかに色白の方が色黒に比して女性度が高い印象を与えられる一方、60％パタンでは評定の方向性が二分され、色黒を色白よりも女性的と見る評定がその逆の評定とほぼ同数認められたのである。つまり、60％パタンにおける肌色間の評定の拮抗は評定が相殺された結果であると捉えられる。本実験の結果は 60％パタンにおいて差が生じにくいということではなく、印象が安定しないということを示唆するものである。

5.　評価方法の特徴、提示条件の影響

注目すべきは実験 C-2 と実験 B-2 の結果の相違である。本実験 C-2 では色黒-色白条件間の差異が最も小さく得られにも関わらず、実験 B-2 においては 60%パタンにおいてのみ有意な性別判断の偏りが得られたのである。この違いは性別の境界線の曖昧性を示唆するものでもあろう。だが、同一回答者であったことを考えれば、実験条件により判断が左右される可能性、課題間の性質の違いについても探ってみる必要が生じる。

実験 B-2 では一形態に対する回答のパタンが 4 種ある。第 1 は色白、色黒の両者に対して女性判断する場合、第 2 は色白に対して女性判断し、色黒に対して男性判断する場合、第 3 は色白に対して男性判断し、色黒に対して女性判断する場合、第 4 は両者に対して男性判断する場合である。60%パタンに対する回答を詳細に亘って検討してみると、第 3、第 4 に挙げた回答パタンは男性 4 名のみであり、殆どは第 1、第 2 のパタンに該当した。Table 3-3-2 は実験 B-2 と C-2 における 60%パタンの回答をクロス表としてまとめたものであるが、表中の上段に数値が集中していることからも前述の傾向は確認できるであろう（尚、実験 C-2 における回答については、Table 3-3-1 と同様に、左側に色白肌刺激、右側に色黒肌刺激が提示された場合の回答となるよう調整されている。よって、例えば表中の「-2」の欄は色白肌の方がかなり女性に見えた場合を示す。また、実験 B-2 に対する回答に欠損があるため、Table 3-3-1 の合計とは一部数値が異なる）。

第 2 の回答パタンについては両実験の評定に大きな隔たりはないと捉えられるが、ここで問題となるのは第 1 の回答パタン、すなわち、絶対的な判断において色白、色黒共女性と回答した場合である。当該の回答パタンは、実験 B-2 の結果上では両者を同じく女性として判断しているということになるが、下表の最上段に示されるように、実験 C-2 における回答は一定しないといえる。色白肌をより女性的に評価する回答者もあれば、逆に色黒肌を女性的とする回答者もある。言い換えれば、女性として分類された後の印象の捉え方が異なるということになる。この傾向は男女で共通しており、結果として色白-色黒間の差は殆ど相殺されているといえる。実験 B-2 において差が顕著となり、逆に実験 C-2 で他の形態以上に肌色間の差が縮まった原因はここにあるといえる。

Table 3-3-2　各実験における 60%パタンの評価

			実験C-2における回答							
			色白の方が色黒より非常に	色白の方が色黒よりかなり	色白の方が色黒よりやや	どちらも同じ	色黒の方が色白よりやや	色黒の方が色白よりかなり	色黒の方が色白より非常に	
			-3	-2	-1	0	1	2	3	合計
実験B−2における回答	色白肌は女性／色黒肌も女性	男性回答者		1	11	5	10	2		29
		女性回答者		4	9	5	13	3		34
	色白肌は女性／色黒肌は男性	男性回答者			1	2	5	5		13
		女性回答者			1		6	1		8
	色白肌は男性／色黒肌は女性	男性回答者			1		1			2
		女性回答者								0
	色白肌は男性／色黒肌も男性	男性回答者		1	1					2
		女性回答者								0
		男性合計	0	2	14	7	16	7	0	46
		女性合計	0	4	10	5	19	4	0	42

ここで検討しなければならないのは、実験 C-2 の 60%パタンに対する評定において、従来のジェンダーステレオタイプに沿わない傾向が得られたこと、つまり、色黒肌の方がより女性として認知される場合が数多く生じたことである。絶対的性別判断を求める実験 B-2 では、60%パタンの色白肌を男性、色黒肌を女性と答えた回答者は男性 2 名のみであった（Table 3-3-1 参照）。逆にジェンダーステレオタイプに沿った判断が計 21 名であり、肌色による判断の変化は極めて有意であるとされたのである。

このような差異からは提示条件による判断の違いが示唆されるといえる。一対比較法においては比較対象がある状態で評定が行なわれたことになるが、この条件では 60%パタンの色黒肌は色白肌に比べてより女性的に見える場合もあるということになる。Figure 3-2-1 として示した図において 60%パタンの 2 刺激を確認することができるが、色白肌の場合には眉や目などの造作が際立って感じられる。逆に色黒肌の場合には造作の存在感が薄れているような印象も受ける。このような差異は、背景となる肌色と造作との明度差、コントラストに起因するが、眉が性別判断に深く関与しているという先行研究の報告に照らした場合(Yamaguchi, Hirukawa, & Kanazawa, 1995)、眉の印象が強まることによって男性的な印象が増すということも考えられる。本実験で用いた刺激についても眉における男女差は明確であり、

男性の方が太い眉を持つという傾向が得られている（巻末資料 資料 1 参照)。

これを踏まえた場合、色黒肌では眉のエッジが肌色に溶け込み、眉の印象が弱まったと感じられた可能性も考えられる。単独で観察した場合には意識されないこのような特徴の差異が、比較対象の存在によって明瞭に意識された可能性も否定できない。

更に、課題の性質についても考えてみる必要がある。実験 C-2 では「どちらが他方に比べてどの程度女性に見えるか」という質問がなされた。一方の実験 B-2 では「それぞれの顔が男女のどちらに見えるか」という質問であった。前者は 2 刺激間の差異を尺度で尋ねるものであり、後者は各顔が属する性別カテゴリを回答するものである。後者における結果で刺激間の違いが現れるには、性別の判断を変更する程の作用を持っていなくてはならない。だが、前者においては「より女性的」というレベルの違いも結果に反映されるのである。前述のように色黒肌の方がより女性的という結果が約半分得られた背景にはこのような課題の性質があり、これによって評定された色白-色黒間の差異が相殺されるという結果が導かれたのではないかと推察する。

両実験の結果を踏まえれば、60％パタンの顔において肌色は性別を左右する決定因として作用するが、比較対象がある場合には色白肌が逆に女性的印象を低める場合も生じるという解釈が妥当であると考えられる。